

平成元年の『おくのほそ道』紀行

横山邦治

ある。

広島駅を二十時発の特急寝台あさかぜ二号に乗車、ガタンピシン、ガタンピシンの振動のたびに目覚めながら、それでもウトウトしている間に東京駅、八月二十六日（土）の早朝で若い娘子軍団は夜おそくまでオシャベリが続いていたようであるが、結構スッキリした顔で下車している、若さゆえの回復力であろう。上野駅に直行して八時発のやまびこ三十五号に乗車、仙台駅には十時二分に着いてしまふ、何をする暇もないまま仙山線十時三十分発の快速電車仙山三号で山寺に向う。

昨年、と言えば昭和の聖代の最後の年、平泉から山寺まで行脚したので、今年山寺が起点なのである。昨夏もお世話になったホテル芭蕉が宿泊場所、山形県内の芭蕉の足跡についてはお詳しい御主人が出迎えて下さる。十一時二十三分着の山寺駅、宿で昼食としておそばを馳走になり、

一

平成元年八月二十五日（金）、芭蕉が『おくのほそ道』の大作脚を完結して三百年、道筋にあたる各地で記念行事が企画実行されている時期、広島文教女子大学の女子学生が研修としての『おくのほそ道』擬似行脚が、本年も開始されることとなった。東北地方の一地点を起点としての行脚であるから、広島からその一地点に到達するのが、まずは一大事業である。新幹線の乗り継ぎが一番時間的に短縮されるのであるが、広島始発の一番に乗っても東京へは昼頃に到着で日程として苦しくなるので、夜行列車を利用することとなる。肝炎患者の一病息災の身としては一寸苦行であるが、若さに何とか負けまいと同行する。本年は友定賢治先生が同行して下さる。若い人に、おんぶにだつて

山麓の根本中堂に向う。昨夏と同じ道順で石段を登る、昨夏は危険というので誰も登らなかつた胎内堂を経ての釈迦堂への参詣道を半分ぐらいの学生は行ったようである。木製の梯子に危険標識が今年は見られなかつた故為もあるが、私は高所恐怖症の気味もあつて最初から敬遠、とにかく奥の院再訪というので石段を登ること専一である。蟬の声はいかがなという風流心が湧いてこないのも凡骨のなせるわざで、昨夏目にした風物を再確認しながら奥の院に向うのが精一杯である。

石段を降りるとなると皆元氣百倍、若い娘子軍は天華岩にも登り始める。木の梯子がところどころに組んであり、伝い登りすれば岩の頂上に達するようであるが、私は木の梯子のところどころで断念。おしりの発達した娘さんたちは、垂直の梯子に取り付いてたちまち姿を消してしまふ、身の軽いことである。彼女たちは、天華岩の頂上で、山寺の全景眺望を満喫したようである。梯子登りを敬遠した連中は、丸っこい力こんにゃくの煮込んだのを賞味することであつた。

山寺散策に時間を過ごして、夕刻ホテル芭蕉で薬湯（薬草が湯舟に入れてあるのだが、山形特産のべにばななどが入れてあつて香ばしい匂いがする。）に入つて、心尽しの夕食である。冷凍してあつた山形名産の桜んぼ、その舌にとろけるような味が何とも言えず、おかわりの連発であつた。

た。

御主人と明日の日程の打ち合わせ、明日は一日中マイクロバスで尾花沢・大石田・新庄と案内して下さるのである。

一一

八月二十七日（日）、尾花沢に向う前に、「山寺芭蕉記念館」に立ち寄ることとなる。本年は「おくのほそ道」三年の記念事業の花盛りで、芭蕉が訪問したとされる各地でさまざまなイベントが行なわれているようである。故郷創生の掛け声のもとに、行政的には山形市に属するこの山寺でも、昨夏と比べると大きな変化が見られる、それが山寺芭蕉記念館なのである。

昨夏見たときは、芭蕉植物園とか何とかうらぶれた公園じみたところであつたのが、今夏は真新しい記念館が忽然と出現しているのである。山寺とは川をへだてた対岸の小さい山の中腹であるから、山寺の風趣を破壊するという心配もないところで、一見すると木造平家建てに類似する豪壮な近代建築である。内部は冷暖房完備で、研修室とか茶室とかが別棟に建てられており、地方の人たちの各種文化的催しに使用されるのであろう。本館ホールの右側に映像展示室という映写場があつて、米倉齋加年が芭蕉に扮した

“おくのほそ道” 行脚の街道案内が見られる。私どもの本年度の企画である最上川下りと羽黒三山参詣が、影像のあたりで先取りする感があつて、大いに参考になる。企画展示室と常設展示室には、山形市周辺で入手できる芭蕉関係の資料が、コピーが大半であるけれども展示されている。地域文化を見直してみようという施策がこんなところに反映しているのであるが、時に自然の破壊と取り引きするところが多い地方開発事業に比すれば、荒廃の感あつた公園の再生であるだけに、可なること万々である。隣地には、山形県産の土産ものを展示した売店があり、初日のこととて土産を買い込む者として少いが、山形の名産を楽しんでいた。山形産と言えは紅花染、これは軽くて美しく女性の土産ものには最適と思うのだが、友人への土産というのでは高価過ぎる感あつて、売れ行きは必ずしもよくなかつたようである。

山寺芭蕉記念館見学を終えて、今日はマイクロバスで尾花沢・大石田を経て新庄に向うこととなる。随行日記によると、芭蕉主従は尾花沢から山寺まで、尾花沢ニ元阪田リ館岡一大田二よ天童一山寺二下一という道筋を辿っている。バスを運転して下さるホテル芭蕉の御主人に、この道筋を逆行していただくことをお願いしたのであるが、マイクロ口とは言つてもバスはバス、どうしても旧道というより快適で危険性のない道を選ばねばならず、旧道に入った

り新しい国道に出たりクルリクルリとジグザグ行進をしている間に、五万分の一の地図では、はつきり道筋を読み取ることができなくなってしまう有様となる。地図を確認しながら車窓の眺望をチェックしようという試みは中途放棄、バスで三百年前の行脚行を追体験しようなどという横着な考えでは何にもならないこと、今更のように実感することである。

山寺から大石田に至る芭蕉の足跡は、“山形へ趣カンマテ止ム” だ後で、廿八日、馬借テ天童二趣。六田ニテ、又内藏ニ逢、立寄ば持賞ス。未ノ中尅、大石田一英宅ニ着。という道筋を辿っている。尾花沢と大石田とはほんの数軒離れて東と西に並ぶ町であるから、そこから南にある山寺との間を往復するのには、同じ道筋を行き来する外はない、天童も六田も往復の途次にある。天童は山寺より一里半とあるのであるから極く近くのはずで、伝統産業として将棋の駒があると聞いているところであるが、しばらく田園の広がる山間の広い国道を進むと、ニヨキニヨキという感じでホテルが林立する町並に出て驚く。新しい源泉が発見されて、天童温泉なる歓楽地が開発された天童市がそれである。温泉に昼間からドンブリコは主旨に反するので敬遠して、将棋の駒の生産工場を見学する。製造元も温泉場向きに観光化されており、観光土産ショップ風であるが、多様な将棋が展示してあるのは珍らしい。珍であるだけに、こ

ここでは学生諸嬢も大分商売繁昌に貢献したようである。

芭蕉当時は山間の農村であったのであるうなど想像しながら、旧道からは離れたバイパス的国道を一直線に北上、東根市（隨行日記に見られる六田はここに属する。）村山市（隨行日記に見られる元阪田〈本飯田の誤記とされる。〉や館岡はここに属する。）を経て尾花沢市に入る。旧道を辿って古き風物を賞美するのは不可と悟ってからは睡魔襲来、ウツラウツラしている間に尾花沢到着。

尾花沢は夏祭りの最中らしく、市街に軒燈が連なり、ひっそりした町並みに人出が多い感じである。^①芭蕉・清風歴史資料館見学を最初にするが、館前には昨夏と異なり芭蕉の行脚姿の銅像が建立されている。三百年の記念事業なのであるうが、尾花沢ともなれば芭蕉様もだけれど、清風の銅像こそがふさわしいと思うことである。紅花商人として活躍して、地域の経済振興に尽した上に、俳諧師としても名を残し、高尾太夫との艶なる伝誦を残して尾花沢の名を天下に喧伝した清風なのであるから、顕彰の価値ありと思うけれども、おしなべて芭蕉様であること芸のない話である。

資料館内の展示物は昨年とほとんど同じで変化は見られない、写真とか模本とかが多いのも山寺の記念館と同巧異曲である。この展示は、成城大学教授の尾形仿先生、鶴見大学教授の山下一海先生、同久富哲雄先生のご指導を受

けて、(一)おくのほそ道拠点のまち尾花沢―(二)鈴木清風の顕彰―を一大テーマに展示”と説明してあるようなものであるが、市政の即効薬的処方によって掻き集めたものを展示したのだけに、先生方も苦勞されたことであろう。長い資料収集の蓄積を経ているものの展示とは異なるだけに、底の浅さが気になるところである。窓口で販売している尾花沢の教育委員会で調査研究した出版物には参考になるものが多くあって、山寺の記念館ほどにインスタントではないものの、やはり三百年に焦点を合わせ過ぎた演出には苦笑させられる。など言った見方は、地域文化向上に関する地方人士の意欲に対する意地悪な冷嘲と批判されるべきなのであろうか。

養泉寺見学など昨年と同じコース、ただ養泉寺の裏、西側の眺望を再確認するために、だから坂を降りてみる。養泉寺は一寸した高台になっていて、眺望の大変よいところ、芭蕉滞在中の眺望の様子を追体験してみたいのである。眼前は広々とした田園風景を見渡すことができ、その中を南北に横切る新庄への街道と最上川の流れとがほぼ直線でえんえんと続き、その向うにはるか月山（一九八〇米）を最高峯とする朝日山地の連なりが雄大に展望されるはずで、その雄大な山容を期待したのである。ところが、街道も最上川もはるかに展望できるのだけれど、今年も深く黒い雨雲が急速に流れて山影を覆いかくしており、どの山影

が月山か指示するに至らない、雨を予感される空模様になつている。

大石田に向う、ホテル芭蕉の御主人が、大石田に住んでおられる高野一栄の子孫の方を知っておられ（子孫の方が若い時、ホテル芭蕉で働いておられたのでよく知っているという表現をしておられた）、大石田で紹介してあげるといふので楽しみにしていたところである。最上川運送の中心地である大石田で舟宿の主人として財を成していた一栄であるが、今はその舟宿の痕跡もない。昨夏、最上川の句碑のある西光寺の和尚さんの言葉として、一栄の子孫の方がたまに話しに来られるという表現で子孫の方の実は判っていたけれど、ホテル芭蕉の御主人と知り合いというのは奇縁で、是非お目にかからせていただきたいと願ひしたことである。新資料発見などということがあるなどは考えなかつたことであるが。

大石田の町中に入って西光寺近くの極く普通の民家の前にマイクロバスを停めて、高野さんく〜と無造作に声をかけられる。最初浪人中とかいう高校生らしい若い人が出てこられ、モタモタしているところにブルーカラー風の極く好人物らしい年配の人が出て来られ、仏壇に案内して下さる。御先祖のお骨が入っているという舍利入れを出して下さり、一栄のお骨だと言われる。家の伝えなのであろう、玉のような仏舍利である。その仏舍利と仏典（經典の巻物

で、立石寺の印のある印刷物である。）だけが先祖から伝わったものだと言われる。西光寺の和尚さんにお見せしようといふので、西光寺再訪となる。饒舌の和尚さん、大歓迎で迎えて下さって本堂に招じ入れられる。これは始めて見たと仏舍利入れと仏典を見ておられたが、事はそれで終り。高野家は一栄時代から傾きかけていたといふけれど、没落すれば遺物も残らないのである。

隨行日記に「廿九日 発・一巡終テ、翁、兩人（一栄と川水）誘テ黒瀧へ被參詣。予所勞故止。」とあって、「黒瀧」なるところに參詣している。バスで黒瀧の向川寺に向う、大石田の町中から最上川を渡って対岸の下流に見える小高い丘の中腹に向川寺はある。山形県教育委員会編纂の「山形県歴史の道調査報告書―奥の細道(一)」に「大石田の対岸横山の村をはるか川下に下った所、最上川河畔をのぞむ山腹に、当時からの名刹黒龍山向川寺があり、芭蕉は川水・一栄とともに參詣のため足を運んだことが曾良隨行記にある。永和の頃、大徹禪師によって開かれ、この辺りの曹洞宗中本山として二十八ヶ寺の末寺を持って栄えたところがあるが、今はさびれて住職すら定住していない。しかし芭蕉の頃は、領主新庄戸沢侯の帰依もあって、かつ金比羅大権現を祭って最上川舟運の人々の信仰を集め、大石田問屋場旦那衆の帰依も深かったらしい。正門の前に樹齡數百年を経る大銀杏がある。」と見られる。人家のあまりない山麓に

石段があつて、入口に巨大な銀杏の木がある、県の天然記念物だという。その奥に荒廃した山門が見える、この頃から雨が降り始めて急速に雨足が強くなってくる。相当大きな本堂はあるが無住である、荒廃の気味が著しい。入口の戸も開閉できるので覗き込むが、何もなくガランとしている。案内図によると、この本堂の右手の山路を登っていくにつれて幾つかの堂塔が残っているようである。雨足が強いうえに、山路が草に覆われてよく判らない状態になっている。雨が降らなかつたなら、芭蕉にあやかつて山登りするところであつたらうが、足もとも怪しい上に雨降り、まむしでも出れば大変也と本堂まで諦めることとなる。

隨行日記によれば、大石田から新庄までの道は「六月朔、大石田を立。辰刻一栄・川水、弥陀堂迄送ル。馬貳疋、舟形迄送ル。」^{ニリ} ^{一リキ} 舟形。大石田へ出形ヲ取、ナキ沢ニ納通ル。新庄へ出ル時ハ新庄ニテ取りテ、舟形ニテ納通。両所共に入ニハ不構。^{ニリハ} 新庄、風流二宿ス。」^{ニリハ} というのであり、今は所在不明という弥陀堂前を通つて舟形、名木沢を経て新庄に入っている。新庄と舟形では手形を「納通ル」ことが必要であつたようで、尿前の関での「断六ヶ敷也」という体験と同じ厳しさが感じられる。尾花沢の天領と戸沢藩との間の緊張感が見られるのであろうか、封建社会における人間交流の不自由さを思うことである。現在は勿論関所は存在しない、バスで新庄に向つて国道を一直線

に進むが、名木沢と舟形の間は難所である猿羽根峠では名木沢の次の集落である川原子の右側から入る旧道に入り込んでいた。この旧道は明治からの国道、マイクロバスが何とか通れるといった広さの砂利のガタガタ道で、明治初年に三島通庸が着けたものという、江戸時代の街道は今少し直線的だつたらしいが廃絶しており、頂上付近が散策道程度に残存しているという。近時開通した国道は、トンネルで舟形に出て新庄に通じているのである。

猿羽根峠の頂上には、縁結びの神として靈驗あらかたなりと称する猿羽根地蔵尊の小社があり、今も諸人の信仰を集めているという。その小社の周辺を整備して猿羽根公園があり、そこには歴史民俗資料館もあるというが、訪ずれるに至らない。大石田でも昼食にありつけず、空腹で道を急いだせいもあるけれど。尾花沢側から登る道は未舗装でガタガタの砂利道なのに、頂上付近は整備されており、新庄へ向う降り道は舗装済みであつた、この地蔵尊は新庄の神様という意識なのであろう。

新庄入口のドライブインでおそい昼食をすませて、そのまま右にまがつて本合海に直行する。旧道とは関係のない新国道である。本合海は昔の乗船場である、隨行日記によれば、新庄の渋谷甚兵衛、号は風流の亭に滞在した芭蕉主従も「三日 新庄ヲ立、^{一リキ} 元合海、一略一船、才覚シテノスル。」とあつて、本合海から乗船したことが判る。

一里半の距離を立派な国道を走るのだから十数分で最上川にかかる新しい大きな橋（本合海大橋）を渡る、ここが本合海だと言われる。整備された川岸に降りてあたりを見廻すと、今は閉鎖している舟の姿をした料亭があり、そのそばに一寸した鳥居もあるが、社の姿は見当らない。川をへだてた対岸には、松の美しい姿が曇り空にくっきり浮ぶ富士山型の少しけわしい山が見え、その中腹に小さな社の姿がある。こちらの岸の鳥居は、その神社の一の鳥居でもあろうか。この山は八向山（二〇五米あまり）で、中腹の社は八向神社という。しばらくはその美しい風景に心を奪われて、写真撮影が盛んである。川下の方は最上の大河が蛇行しながらも真直に北に向って流れているのに、川上を見ると川が大きく蛇行して右手の方に姿を消している。地図を検すると、逆U字型に蛇行する最上川の頂点に新田川が流れ込み、その上流が本合海となっているので、この八向神社前の川岸は本合海ではないことになる。今一度本合海大橋を逆行して右手の小さな道路に入ると、古い面影を残した民家が櫛比したところ、小学校やら郵便局やら寺社やらが集中した集落がある。その集落の中の道、旧国道という面影を残した道を突き抜けると最上川の河岸に出る。高い築堤があつて豊かな水の流れが淵を作っており、そこにも頑丈な造りの橋脚の痕跡が残っている。対岸を望めばそこにも橋脚の跡があつて、その造りは明治か大正かの名残り

を残している。その橋脚の右側に一寸した公園めいたところがあつて、芭蕉主従の像が建立してある。ここが本合海の船着場跡なのである。

右手の方を見ると、大きく屈曲した河の岸に降りるだらだら坂があり、そこは川砂が堆積していて海岸の砂浜のようになつており、数隻の小船が繫留してある。川魚漁用の舟のようである。この浜で舟に乗っていたのであつたらう、雨が降つていて増水しているはずにしては川の水流が少く、右手に新田川の流れが流入しており左手に大きく屈曲して流れるあたりの瀬は、川底が洗われているのが見えるような感じである。旧橋脚のあたりは淵のようになっていのに比して、水流が少いように感じられるのも、日本三大急流の一つと言われる最上川の水の流れの変化の激しさを示していると言えるようである。それは地形の変化の複雑さを示しているのもあろう。

私どもが芭蕉像の周囲で騒いでいるのを見てか、七十才ばかりのお年寄が出て来られてホテル芭蕉の御主人と一緒に、所の言葉で話し合つておられるのを傍聴する。本合海大橋を通る新国道は極く最近開通したもの、それまではこの町内の道が国道で、ここに架つていた橋が国道用の橋であつた。この橋が架つた当時は随分便利になつたもので、舟便は消滅したが内陸部と酒田との交流はこの橋で行なわれていた。明治から昭和にかけてこの橋がメインストリー

トの役目を果たしてきたが、近年雨が降ると一挙に増水するようになって、大雨になるとこの橋が水につかって不通になることが多くなってきた。山奥の自然林だったぶな林が伐採されて杉などが植林されるようになって、山の保水能力が低下して雨水の調整が十分できなくなってきた。昔はこの浜から舟で酒田まで行けたのだが、今は川底が浅くて無理である。今日では川魚の漁船が少しあるだけで、川で生活する人は少い。

流れの向うを見やると、大きく屈曲して新田川が流れ込んでいるあたりの川底が浅く波立っているようでもある。旧橋脚の下の淵になっていたり、あたりは水流豊かの感を与えるが、八向神社前の水流を見ても、舟便というのは本合海からは無理になっているのであろう。時の流れとも言えるが、故老の言のごとくであるならば、人間の手による自然破壊が、最上川の悠久の水流の様相を変化させていると言えるのです、恐ろしいことです。

今夜の宿舎である新庄第一ホテルまでマイクロボスで送っていただく、本合海では雨も降っていません。ホテルに近付くにつれて雨足が強くなっている。夕暮れ刻から、ホテルに荷を置いて新庄における芭蕉の足跡を訪ずれる心算であったけれど、雨が強くて気力消失である。若い女の子たちの中には町の中に出かけた者もいたが、皆々散々な目に会ったようである、それどころかこの強い雨で

明日のメインイベントとでも申すべき最上川下りが不可能という情報が入り、さていかががすべきかと夜中雨の音に聞き入ることとなってしまった。

三

八月二十八日(月)、夜明けに至るも雨の屋根をたたく音が激しい、暴風雨という感じの空模様になっているようである。最上川下りの舟の出る古口港に電話で問い合わせても、結局本日の川下りは中止という確答で、皆々がつくりとくる。川下り中止となれば、陸羽西線を利用して清川まで行く外はない、雨の中を鈍行列車に乗ることになってしまう。

強雨の田園風景の中に最上川の風情を求めて、窓外に目を集中する。新庄を出てしばらくは田園の中を走っていたのが、しばらくして左手に濁流になっている小さな川が見えてくる。本合海で見た最上川に比すると小さすぎるので地図を見ると、舟形川という支流のようである。舟形の駅からはしばらくその濁流が見えていたが、トンネルを出たり入ったりしている間に大きな鉄橋を渡る、地図を検すると津谷と古口の鉄橋とともに最上川本流の上に架っている橋である。最上川下りをする予定だった古口の駅からは、最上川の大きな流れが右手に見えている。車内は貸切り同

然で、川をよく見える方の座席を求めて右に行ったり左へ行ったりである。

車窓を打つ雨足の激しさは、列車の速度との相乗効果もあるだろうが、横なぐりの雨と称すべきか、篠突く雨と形容すべきなのか判らないけれど、閉め切った窓からも雨水がしぶき込んでくる有様、雨でガラス窓が時に不透明になるので窓を開けようとしても開けられないといった状態である。車窓から眺めやる最上川の水流は、赤土色に激変しており渦を巻いて流れている。雨に煙って定かに見えない対岸は、緑深い木々に埋もれた山々の連なりで、最上の流れが深い谷間を形成しているようである。白糸の滝とか仙人掌とかが対岸に見られるはずであるが、トンネルを出たり入ったりして車窓を流れる風物に見とれている間に見逃してしまう、高屋駅を経て清川駅に着く。田舎の駅である、羽黒に向うバスも回数が少く、雨に降り込められて清川駅で長時間を過ごすこととなる。

清川駅で説明板を見ると、幕末の志士清河八郎の生地であり、それに関連する歴史的遺物があるようである。藤沢周平の『回天の門』（昭和54年11月文芸春秋刊）を想起する、幕末激変の時代に「早すぎた志士」として凶刃に倒れた清河八郎が、素封家の跡とりでありながら鬱勃たる情念をもてあまして放蕩に走ったとされる土地である。東北の辺陲の地にあつては、血気盛んで才気溢るる八郎の志を展ぶる

に適しなかつたのもあろうが、最上の流れは激しくとも周辺の風物は平和そのものである。線路沿いのお寺に、清河八郎の墓などあるようであるが、寺らしきを遙かに望んで雨には勝てず、駅舎から外に出ることは遠慮することである。

本合海から舟に乗った芭蕉主従は、この清川で上陸したようである。隨行日記によれば、「天気吉。三日 新庄ヲ立、^{一リキ}元合海、一略一船、才覚シテノスル。^{一リキ}古口へ舟ツクル。一略一関所、出手形、新庄ヲ持參。平七子、呼四良、番所へ持行。舟ツギテ、^{三リキ}清川ニ至ル。酒井左衛門殿領也。平七子状添方ノ名忘タリ。此間ニ仙人掌・白糸ノタキ、右ノ方ニ有。状不^レ添シテ番所有テ、船ヨリアゲズ。」とあつて、清川での監視は嚴重であつたようである。新庄藩と鶴岡藩との間における緊張関係か、当時の封建体制下においては当然のしきたりなのであろうか。芭蕉主従も清川から^{一リキ}厂川^{三リキ}羽黒手向。荒町。申ノ刻、近藤左吉ノ宅ニ着。」と辿つて羽黒に至つてゐる。その間を私どもはバスで行脚である、芭蕉たちも馬に乗つたかも知れないなど思いながらである。

出羽三山神社の門前町とでも言うべき羽黒山麓の宿坊が集まつている手向を通り過ぎ、羽黒国民休暇村の今夜の宿舎に直行する。雨も止んで曇天ながら外歩きが出来る状況になつてゐる、身軽になつて外出。

バスで庄内交通羽黒センター前に逆行して隨身門から羽黒山（四三六米）頂の出羽神社に向うこととする。出羽神社の御祭神は伊氏波神・稲倉魂命であるが、冬期に月山と湯殿山には積雪で参詣不可能となるので、山頂には三神合祭殿が鎮座ましますという。出羽三山の神々が合祀されているのである。隨身門をくぐると祓川という川に向って下りの石段がしばらく続く、継子坂と呼ぶらしい。赤い欄干の神橋を渡ると一寸した庭園めいたところあって須賀の滝が見える。ここからは長い長い上りの石段（二四四六段という。）が続く、石段というより起伏の多い山の斜面に付けた石畳とでも呼ぶ方が判りがいいかも知れない。老杉で薄暗い石畳を少し進むと国宝の五重塔が見える。

出羽という辺地には珍らしい、旧くから羽黒山麓に佇立する五重塔の前に立った一瞬、私の脳裏にひらめいた幻影については、『文教通信』第34号に次のような雑文を書いているので、ここに再録する。

羽黒山は古くから修験の霊場でした、『おくのほそ道』の旅を三百年前に実現した芭蕉は、真言の古刹である立石寺の「岩に巖いはを重ねて山とし」た千数百段の石段の昇降のあわいに、

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

の句を得て、更に最上川を下り羽黒の「めでたき御山」に詣でたのでした。

昨夏、私ども文教の「奥の細道キャラバン隊」も、立石寺と最上川を経て羽黒神社にたどり着きました。

隨身門をくぐりしばらく石段を降りて祓川を渡ると、二キロもの間延々と続く石段の参道です。参道の両側は数百年の樹齢を重ねたかと思われる濃緑の杉並木が続き、曇天のせいもあるのですが、木の下闇という感じですね。その参道の石段をしばらく進むと、左側の杉並木の中に五重塔が見えます。

室町初期の代表的五重塔だそうです。杉の巨木を額縁として五層の屋根が直立して大きく浮き上り、彩色は剝落したのか木の素地が薄灰色に露出し素朴で豪宕な姿をそそり立てています。その五重塔への凸凹の石畳の参道に足を運ぼうとした一瞬、私は足を止めていました。

全山をそれまで包んでいた蟬の声が、その一瞬、目前の五重塔に吸い込まれたかのように消えてしまったのです。傍らの学生に「蟬の声が！」と呼びかけましたが、すぐに再び蟬は鳴き始めていました。耳をすますと、蟬の声にはリズムがあることが判ります、そのリズムが微妙に重なり合う一瞬、それが空白になるのです。その一瞬を、蟬の声が五重塔に吸い込まれたように錯覚したのでした。

私は卒然と立石寺での芭蕉の句を想起していました。あの句は三転してあの句形となって『おくのほそ道』の

本文の中に定着したのですが、「蟬の声」が岩石の中に
吸収されていくという発想は、初案の「山寺や岩にしみ
つく蟬の声」（書留）から変っていないのです、「しみつ
く」が「しみ込む」（初蟬）と変り、「しみ入る」と表現
が深化していく過程はそれなりに充分に吟味しなくては
ならないのですが。

芭蕉が立石寺に立ち寄ったのは七月上旬、私どもが羽
黒の石段を登ったのは八月下旬、そこでの蟬の鳴き声は
違うでしょうが、油蟬でもニイニイ蟬でもリズムを有す
る鳴き方は同じなのです。とすれば、私が五重塔に正対
して一瞬蟬の声の空白を感得したと同じ体験を、芭蕉は
あの峨々たる岩山のどこかで体感したのではないでしょ
うか。

急坂である立石寺の石段では、登ることだけで一心不乱、
昨年と今年二度も往復したにもかかわらず、せみ塚も拝し
たにかかわらず、その場で蟬の鳴声の在り様に思いをめぐ
らす余裕はなかったようである。蟬の声の句で、変ってい
った語の在り方についての論議は多いけれど、変らない二
語「しみしむ」と「蟬の声」の組み合わせがどんな現象
を指すのかに付いては、仏教的形而上的論議のみが積み重
ねられているようにも思う。しかし幻想は幻想、平坦な羽
黒山の石段で一瞬ひらめいた幻想は、索強付会の説のごと
くでもある。

五重塔を通り過ぎてしばらくすると一の坂である、くね
くね曲った石段で、その石段も幅広だったり幅狭だったり
で不揃い、登りにくい石段である。一の坂を登り切ってし
ばらくしたら坂を行くと二の坂、私のような足の悪い初
老の男は両手を時々使わなくては恐ろしい急坂で、中途に
ある二の坂茶屋で一服する。宿舎で昼食をすませてきたの
だけれど、花より団子である、下界の風物を楽しむとい
うほどの展望はない。若い人はサッサと登って行って姿が見
えなくなっている、数名の女の子と二の坂を登り切ると、
右手の方に「南谷別院跡入口」の標識があり、ここが芭蕉
が泊った南谷かというので右手の山道へ入っていく。五百
米あまり平坦な山道を進むと、山中に相当な面積を有する
平らな場が現われる。礎石が点在して古びた池があつて、
「県指定史蹟羽黒山南谷」の標柱が入口に建っている。池
は心字池の痕跡を有し、相応に手の込んだ庭園が営まれて
いた様子がうかがえる。礎石の有様からは、相当宏壮な寺
院が建立されていたと思われる、「有難や」の句碑があり、
文化十五年の建立という。木立ちの間から太陽のかほそい
光が射し込む天候と変り、廃虚の陰影に富んだ美しさが浮
かび上ってくる、しばらく惘然と佇んでいる。「雪をかほ
らす」との雪は全く見当らないけれど、青葉を吹き通る風
は涼しくて、汗も吹き飛ばしてくる。

三の坂を登り切ると羽黒山・月山・湯殿山の三神合祭殿

の大きな社殿の前に出る、神前に古鏡が多く発掘されたという鏡池という大きな池があり、更に俳聖芭蕉像と芭蕉の三山巡礼の大きな句碑が併立しており、羽黒山の芭蕉に対する思い入れの深さを感じさせてくれる。少し離れたところに蜂子皇子の墓があつて、出羽三山の歴史を垣間見る。芭蕉が「五日、現権に詣。当山開闢能除大師はいづれの代の人と云事をしらず。」と記す能除大師が崇峻天皇第三皇子の蜂子皇子である、「三山開闢蜂子皇子は、難行苦行の末、羽黒大神の御示現を拜し、大般若心経を誦し、八息に全巻を誦し、僅かに「能除一切苦」の一節を聞く事が出来たので、皇子を能除太子と称したと伝えられる。」(「出羽三山と芭蕉」出羽三山神社社務所編)とある皇子。蘇我馬子の乱の時に此地に来て三足の霊鳥に導かれて開山したというのであるから、悠久の昔の話、芭蕉が「いずれの代の人と云事をしらず」と記すのは無理からぬことだが、何時の代に造られたものなのだろうか、古代色豊かな墓というのではない。

日本一のカヤ葺屋根と称される合祭殿の前を通り過ぎて一段高いところに出羽三山博物館があり、館前に芭蕉が月山参詣の時に宿泊したかとされる江戸期の山小屋が復元されている、横になって身を入れることが出来るだけの粗末な小屋である。「笹を舗、篠を枕として、臥て明るを待。」と記した芭蕉の苦難を思うことである。南谷で時間をとら

れ、博物館を拝観する時間がない、「おくのほそ道」三年を記念して特別展が開催されていたのだが、秋に俳文学会が鶴岡で開催されるのでその時にでもと断念。結局、俳文学会には参加できなかったけれど。

土産物の店が並ぶ道を通り過ぎて、「奥の細道」歩道と標識のある旧道と羽黒山道路(有料)の分かれ道に出る。昔の月山道路である旧道を歩いて宿泊所に帰ることとする、少しは芭蕉様の御跡したいという気持である。深い山の中の道には、丸い石が等間隔に並んで足場作りをしているところもあり、だからの下り道である。しばらく進むと相当大きな神社が見えてくる、吹越神社と呼ぶらしいが、庭前に集合していた山伏姿の人が血相を変えてバラバラと走ってきて、今は修業中でここは女人禁制だから来てはいかんと叫ぶ。恐ろしくて吃驚して、女人禁制とは何たる時代錯誤ぞと女子学生諸君は目を四角にしていたけれど、ここで憲法論議も出来かねて、急いで少し離れた自動車道に逃げ込むことである。確か旧道脇の木に立入禁止の木札が下っていたようでもあるが、修行中ということであったのであろう。それにしても女人禁制という叫び声は大時代で時代錯誤と申すべきであろうが、普通人禁制というのでは様にならないからでもあろう。

神社を少し離れて再び旧道に戻ってどんどん下っていくと石段があつて、手向に通ずる広い道路に行き当る。その

突き当りに荒沢寺という寺があつて、是より女人禁制の碑が建っている。極く最近まで、女性の月山への参詣はここまでであつたという、時代は大きく転換して今では女性の月山詣でも自由なのであるが、時に今日の吹越神社におけるような事態も起るのである。意識の底に残っている伝統というものは、一朝一夕に消し去ることは不可能のようである。

今夜は羽黒山の月山側麓に位置する羽黒国民休暇村に泊ることになっている、明日の日程について夕食時に論議となる。休暇村の従業員の方が、明日の月山登山は荒天で無理かも知れないと言われ、雨が降り止んだので最上川下りは可能という情報を学生が聞き込んできて、月山参詣か最上川下りかと意見が分かれたのである。結局二分されて、月山参詣部隊と最上川下り部隊に分かれ、最上川下り部隊は友定先生に付き合っていたかどうか不安なことである。月山参詣は無事に登山できるかどうか不安なことである。

この夜、NHK・TVの教育放送で、ETV8「十七文字の心と文化・ドナルド・キーン、芭蕉を語る」という放送があり、立石寺で収録されたキーン氏と俳人鷹羽狩行氏の対談が放映された。キーン氏の、早くに訪ずれた立石寺と今の立石寺を対比された感慨など、日本文学に対する深い理解に裏打ちされていて感銘を与えられたが、鷹羽氏が蟬の句について、騒の極まりの閑という、仏教的というか

哲理的というか東洋的と申しましようか、更に申せば純日本的でとも言うべき、形而上的芭蕉発句観を滔々と弁じられるのには、羽黒山の五重塔前の経験があるだけに、一寸違和感を抱かずにはおれなかつた。キーン氏の顔を見てみると、相槌を打ちながらも一寸困惑したような表情がうかがわれたが、米国人というのは自分の意見を明解に表明するそうであるから、キーン氏の表情を同意しかねるという相槌の打ち方だという私の理解は、これ又和流の日本的思い入れであるかも知れなかつた。

羽黒山のように老杉の林立する中での蟬の生態と、立石寺のように雑木（自然林）密生の中での蟬の生態とは、その在り様に微妙な差があるのであることは察しられるが、同じ出羽の国で、ほぼ同じ緯度にあることであれば、さほど蟬の鳴く声に差異があるわけでもないであろうから、一瞬の静寂に対する私の体験的理解の在り様による、鷹羽氏的理解に対する違和感を、私なりに是認してみることであつた。

雨の降り止んだ羽黒の夜は、静寂そのものである。

四

八月二十九日（火）、雲の流れが早い、空模様を見ながら、果して月山に登れるかどうか判りませんよというのが休暇

村の従業員の判断である。最上川下りは大丈夫というので欣喜雀躍して下山するグループに比して、月山参詣グループは一寸気がかりな表情で休暇村前のバス停からバスに乗り込む。一日数便のバスが、月山の八合目までは往復しているのである。

月山参詣を芭蕉は「八日（陽曆七月二二日）月山にのぼる。木綿しめ身に引かけ、宝冠に頭を包、強力と云ものにて道びかれて、靈霧山気の中に氷雪を踏でのぼる事八里、云々」と記する、随行日記を見ると「本日、天気吉。登山^三 強清水^三 平清水^三 高清水（水）、是迄馬足叶。云々」とあるので、「氷雪を踏んでのぼる事八里」と申しても、七里ばかりは馬に乗って行ったのではないかと邪推し、七里ばかりと申せば高清水が七合目であるから、ほぼ八合目までは馬で登山ということではないか、とすればバスと馬の違いはあっても芭蕉様と大差なしなど慰めることである。

バスには沢山の道者姿の人が乗っており、私の隣席には七十才ばかりの元気なお婆様が座っておられ、毎年この頃にはお山に登る、昨年は普陀落参りをした、万年雪の中から古銭か湧いてくるありがたいところだなど、問わず語り話して下さる。信仰深い人なのであろう、月山も今は女人禁制ではないのである。

車窓の風景は一合目二合目あたりまであまり変化はないが、三合目あたりから樹木の様相が変ってくる。始めは杉

とか桧とかという植林した山相なのであるが、三合目あたりからは自然林となっているようで、巨木が重なり合い、倒木も多く見られるようになる、深い積雪の影響がうかがえる。これを逆に申せば、月山の麓にあたる広大な地域が人工によって汚染されているということなのであり、一日の本合海で聞いた故老の話が生きてくるということになるようである。それだけに月山の自然林がこれ以上汚染されないことを願うことである。その自然林を破壊しているのであるが、バスの通う月山高原ラインは、うねうねと蛇行し昇降を繰り返しながら高度を高め、やがて車窓から見られる植物は丈の低い高山性灌木ばかりとなって、雄大な風景が眼下に展開する八合目の終点に着く。雲の流れは早い、薄い霧がまだ周囲を渦巻いているが、雲の切れ目が広くなり風もさほど激しくないので、月山登山は可能という、道者姿の人たちは忽ち姿を消してしまった。

八合目には、バス停などのある広場と、軽い食事や休憩の出来る月山レストハウスがある。宿舎で弁当が用意出来なかったのも、レストハウスで何か求めようとするが、土産物は沢山あるのに弁当はなく、大福まんじゅうやら何やらとウーロン茶など求めて、月山頂上を目指して出発である。昼食時には山頂に着いているだろうと、道者姿の人は話しておられたが、6K弱の距離を三時間強かかるということになる。女連れだからとも言っておられたが、月山頂

上への道のけわしさを予感させる言葉である。

植物音痴の私には猫に小判であるが、美しい高山植物の宝庫である陀弥ヶ原湿原の中ほどに、御田原小屋があつて月山中の宮という小さな社が鎮座します。一ノ岳、二ツ石、畳石などという名ある場所を通る過ぎると、仏生池あつて九合目の仏生小屋である。二ツ石で標高千七百五八米、粗末な仏生小屋から下を望めば、万年雪が山陰に沢山残っている。吹き渡る風も肌寒さを感じさせるようになる、高山なのである。死火山ではあつてもなだらかな山容で名のある月山であるから、岩石峨峨たる峻険というのではないが、それでも足の不自由な私など後れがちになる岩山道であつた。

ところが九合目からは、山の様子が変わってくる、オモワシ山を越して行者戻、モックラ坂などという場所に来ると、高所恐怖症の気味もあるのか、一寸足がすくむという感じになる、と言ってここまで来て後戻りというのは末代までの名折れ也と瘦我慢、時には下の方を見ないようにして両手を使いながら登ることである。女子学生諸君の方が、はるかに先に登っていて、足弱の私を待ってくれている有様、こうなるともう足手まといである。山伏姿の行者たちが、太い杖をついて飛ぶよう降りてくるのに数多く出会う。修行中なのであろう、頑張れと声をかけて行く山伏もいる。ここでも女人禁制は前代の遺物なのである。わらじをはい

た行者も居るが、大半は地下足袋とかスポーツシューズで、山伏姿とは不つり合ひである。がこれも時代である。この頃には、時に私どもを巻き込んでいた雲も切れて、美しい下界の風景が満喫できるようになる。あれは羽黒かな、鶴岡かななど逃口上で身体を休めながら、やつとの思いで山頂に着く。

三百円也で精進潔斎していただいて月山神社に参拝、千九百八十米の頂上に鎮座しますお宮の石垣の中から四方をのぞき見ることである。月見ヶ原をはじめ山の斜面が岩と高山植物との色彩の交響曲、太陽の光が射し込んで飛んでいるちぎれ雲の影が鮮明に浮き出て美しい。月見ヶ原から遠く続く山並みの連なり、その間をうねる最上川の流れを遠望しての大福まんじゅうは、結構美味である、四時間近くかかった足弱軍団ではあつたが、ともかく月山頂上に登り得たのである。芭蕉たちは、私どもと同じように「弥陀原中食ス。是ハフダラ、ニゴリ沢御法ナド、云ヘカケル也難所也」を経て「こや有御田有」（御田原小屋のことである）、月山中の宮がある。「行者戻りこや有」（九合目の仏生小屋あたりを指すか）を通過して「申ノ上尅、月山ニ至。」ている、午後四時頃到着したことになる。弥陀ヶ原即ち八合目で中食をとっているから、四時間あまりの時をかけている。私どもよりは健脚であるはずであるが、同じ人間であるから大差なしのようである、芭蕉も山伏並み

ではなかったであろう。申の上尅から夕刻まで大分の時間があったのだが、芭蕉たちは「角兵衛小や二至ル。」という形で宿泊している、「雲晴テ来光ナシ。夕ニハ東ニ、旦ニハ西ニ有由也」という有様。次の七日に、芭蕉たちは「湯殿へ趣」、そして月山へ帰って、その日のうちに「夕暮、南谷ニ帰。甚勞ル。」ということとなっている。湯殿山へ向う道は急坂である、私どもには湯殿へ向う準備はなく、写真におさまったり何なり若さのパーフォーマンスあつて下山である。

下山には登りの苦しさはないので、短時間に楽々と八合目まで帰着すると思っていたら大間違い、急坂の下りは危険性も感じられて恐る恐る石と石との間をつたい下りることもあり、山伏のようにピョンピョン石と石との間を飛びながら下りるといふ具合には参らないのである。無量川原では大休憩ということとなり、結局往路に近い三時間ぐらいかかつての下山となった。

月山レストハウスで時間を過ごし、夕刻の数少ないバスに乗って羽黒国民休暇村に帰る。最上川下りの部隊も満足そうな顔をして帰ってくる、月山登りの部隊も大満足、自然の中であれば山でも川でも人間は活性化するものらしい。この旅行の最後の夜は、疲れはあるものの話題の豊富な宴となった。

五

八月三十日（水）、今日は鶴岡十一時四十分発のいなほ8号で帰広の予定、羽黒国民休暇村を少し早めに出発して、鶴岡で二時間弱の時間を作ることにする。各自が自由に鶴岡の町を楽しむこととしたのである。

芭蕉と鶴岡は、三日泊りの縁である、「羽黒を立て鶴岡の城下、長山氏重行と云物のふの家にもかへられて、誹諧一卷有。」⁽²⁾というだけのことである。それでも鶴岡市内では、長山氏の屋敷跡、芭蕉が酒田に向けて出発したとされる場所（内川乗船地跡）などが顕賞されており、乗船地跡の周辺には古いお寺もあるらしく、最上川下りの部隊はそれらも探訪したというけれど、限られた時間では城下町鶴岡を証する鶴岡城跡と致道博物館の見学第一とそこに向う。鶴岡城跡は鶴岡公園となっており、城壁やお堀が一部現存するだけ、その隣地に庄内藩の御用屋敷だったところあり、致道博物館がある。

庄内藩は徳川四天王の一人酒井左衛門尉忠次が始祖で、この地方のお目付役として十四万石を領して睨みを効かしたようである。代政治政よろしきを得たようで、天保期に藤沢周平の歴史小説「義民が駆ける」（中公文庫）に描かれたような、藩主の国替えを領民が阻止するという事件も

惹起している。致道博物館の在り様も、藩主と領民との善意が微妙な調和をもつて今に生かされているように思えなくもない。旧西田川郡役所、旧鶴岡警察署が明治の面影を残して移築され、庄内藩主御隠殿と庭園がメインで、その隣りに田麦俣の民家が移築されている、江戸の明治のこの地方の文化が一堂に集められようとしており、その底には酒井家の古い感覚ではあるが善意の感じられる展示方法がある。ふと彦根市と井伊家のつながり、彦根城を中心としての彦根文化の保存の在り様を想起することである。そこに見られる共通性は、江戸期における譜代と外様の大名の郷国における存立の在り様に、何か深い原因があるのかなと思ったりすることである。

致道博物館の展示物を充分に見るに至らないで、鶴岡を出発である。鶴岡から新潟までは、一時間あまりの汽車旅、しばらく平野の中を行くが、三瀬という駅あたりからは越後の日本海を右手に見ながら一路南下する。しばらく南下すると、右手海上はるかに相当大きな島影が見えてくる。佐渡島ですかと、客席で暫時休憩中の車内の販売係の女性に尋ねると、佐渡島は今少し南の方に小さく見えるはずだが、余程晴れていないと見えませんとの答えである。今日は少し靄ってはいるものの太陽の光が周辺を強く照らしている、この程度の晴れでは駄目なのであろう。地図を見ると、目の前の島は粟島浦村という島である。その島影以外

は、ともかく変化の少ない海岸線をひたすら南下するのみ、永い旅を続けた越後の印象をほとんど記さなかった芭蕉の想いも、何となく判るような気がしないでもない。

新潟駅に十三時二十九分着、十三時三十七分発のあさひ三三四号に乗車して上野に向う。新幹線の乗継ぎで広島に、新幹線の速度では、TVのミステリーに利用されるぐらいがせいぜいで、旅の感懐は浮んでくる暇はないようである。

この度の行脚に参加した学生は、友定賢治先生の外に文学部国文学科第三年次生の伊藤悦子、今村里美、江畑京子、大村明子、大中洋子、国次あゆみ、佐藤勝子、清水美穂、高野優子、丹下京子、続木幸美、富樫路子、野田直子、松浦真理子、松永香織、溝辺恵美子、宮崎恵、渡里佳代、向井琴美の諸嬢である。

注(1) 八月二十八日は、花笠踊りの当日であったようで、尾花沢では花笠踊りの発祥地と称して盛大なお祭りをするようである。パンフレットの一文「搦いて固めた徳良の堤、水ももらさぬ深い仲 徳良湖築堤のときうたわれた土搦唄の一句である。この唱にあわせて、「すげ笠」を廻しながら踊ったのが「花笠踊り」の始まりといわれる。八月二十八日には市内各地に受継ぐ笠回しの踊り集団が豪快なおどりを披露する。」とある。当日の夜は大雨であったが、どのようなお祭りになったのであろうか。

(2) 曾良の俳諧書留に「めづらしや山をいで羽の初茄子」を

発句とする四吟（芭蕉、曾良、呂丸、重行）歌仙が記録されている。この発句は著名で、鶴岡市日枝神社境内の句碑を始めとして、鶴岡周辺に何基かの句碑があるようである。ここに言う初茄子というのは民田茄子を指すとされ、この地方の特産である。この民田茄子を加工したお菓子が土産物として売り出されているが、大松屋という初なすび本舗の「茄子にまつわる物語」というパンフレットの一部を転載する。「元禄二年初夏、奥の細道をたずねた折、翁は城下町鶴岡の島居町長山宅に泊られ、食膳に出された小粒の茄子をつまみ、思わず珍らしや山を出羽の初茄子とうたいあげた。こんむらさき色の小粒でつややかな愛らしい一口民田茄子、茄子にかかわる歌碑はこの庄内地方に数ヶ所立っついて当時を偲ぶよすがとなっています。」「茄子はこのようにして目出鯛いもの、縁起の良いもの、味の良いものとして称えられて来ました。みちのく出羽三山羽黒の麓、鶴岡市郊外の民田部落のみで栽培された小粒な民田茄子、幣店ではこの茄子を生のまま独特な製造加工法で、ふるりの味珍菓として世に出し、数々の推賞を受領して参りました。云々」一寸した珍味である。